

JAPANESE FOR FOREIGNERS

監修 名柄 迪

■横林宙世 ■下村彰子 著

せつぞくのひょうげん

接続の表現

CONNECTIVES

*Innovative
Workbooks
In Japanese*

外国人
のための

日本語
例文・問題
シリーズ

6

荒竹出版

外国人のための日本語 例文・問題シリーズ6

接 続 の 表 現

横 林 宙 世
下 村 彰 子
共著

荒 竹 出 版

著 者 紹 介

横林宙世（よこばやし・ひさよ）

国際基督教大学教養学部語学科卒業。ニューボート大学大学院英語教育学修士課程修了。ラオス王立師範学校、アテネオ・デ・マニラ大学講師を経て、現在、上智大学比較文化学部講師。著書に、*Japanese for Everyone*（共著、学習研究社）がある。

下村彰子（しもむら・あきこ）

国際基督教大学教養学部語学科卒業。フランススコ会聖ヨセフ日本語学院教師。上智大学比較文化学部講師。著書に、*Japanese for Everyone*（共著、学習研究社）がある。

外国人のための日本語例文・問題シリーズ6
接続の表現

昭和六十三年三月五日
平成八年四月十二日
初版
六刷

著者
横林宙世
下村彰子

発行者
荒竹勉

印刷／製本
中央精版印刷

発行所
荒竹出版株式会社

東京都千代田区神田神保町二一〇

郵便番号一〇一

電話〇三―三二六二―〇二〇二

振替（東京）二一―六七―一八七

（乱丁・落丁本はお取替えいたします）

ISBN4-87043-206-4 C3081

監修者の言葉

このシリーズは、日本国内はもとより、欧米、アジア、オーストラリアなどで、長年、日本語教育にたずさわってきた教師三十七名が、言語理論をどのようにに教育の現場に活かすかという観点から、アイデアを持ち寄ってきたものです。私達は、日本語を教えている現職の先生方に使っていただくだけでなく、同時に、中・上級レベルの学生の復習用にも使えるものを作るように努力しました。

このシリーズの主な目的は、「例文・問題シリーズ」という副題からも明らかなように、学生には、今まで習得した日本語の総復習と自己診断のためのお手本を、教師の方々には、教室で即戦力となる例文と問題を提供することにあります。既存の言語理論および日本語文法に関する諸学者の識見を無視せず、むしろ、それを現場へ応用するという姿勢を忘れなかったという点で、ある意味で、これは教則本の実用文法シリーズと言えるかと思います。

従来、文部省で認められてきた十品詞論は、古典文法論ではともかく、現代日本語の分析には不十分であることは、日本語教師なら、だれでも知っています。そこで、このシリーズでは、品詞を自立語では、動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞、副詞、接続詞、数詞、間投詞、コ・ソ・ア・ド指示詞の九品詞、付属語では、接頭辞、接尾辞、(ダ・デス、マス指示詞を含む)助動詞、形式名詞、助詞、助数詞の六品詞の、全部で十五に分類しました。さらに細かい各品詞の意味論的・統語論的な分類については、各巻の執筆者の判断にまかせました。

また、活用形のについても、未然・連用・終止・連体・仮定・命令の六形でなく、動詞、形容詞ともに、十一形の体系を採用しました。そのため、動詞は活用形によって、u動詞、ru動詞、行く動詞、来る動詞、する動詞、の五種類に分けられることになります。活用形への考慮が必要な巻では、巻頭に活用の形式を詳述してあります。

シリーズ全体にわたって、例文に使う漢字は常用漢字の範囲内にとどめるよう努めました。項目によつては、適宜、外国語で説明を加えた場合もありますが、説明はできるだけ日本語でするように心がけました。

教室で使っていたく際の便宜を考えて、解答は別冊にしました。また、この種の文法シリーズでは、各巻とも内容に重複は避けられない問題ですから、読者の便宜を考慮し、別巻として総索引を加えました。

私達の職歴は、青山学院、獨協、学習院、恵泉女学園、上智、慶應、ICU、名古屋、南山、早稲田、国立国語研究所、国際学友会日本語学校、日米会話学院、アイオワ大、朝日カルチャーセンター、アリゾナ大、イリノイ大、メリーランド大、ミシガン大、ミドルベリー大、ペンシルベニア大、スタンフォード大、ワシントン大、ウィスコンシン大、アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター、オーストラリア国立大、と多様ですが、日本語教師としての連帯感と、日本語を勉強する諸外国の学生の役に立ちたいという使命感から、このプロジェクトを通じて協力してきました。

国内だけでなく、海外在住の著者の方々と連絡をとる必要から、名柄が「まとめ役」をいたしました。したが、たわむれに、私達全員の「外国語としての日本語」歴を合計したところ、580年以上にも及びました。この600年近くの経験が、このシリーズを使っていたく皆様に、いたずらな「馬齢

の積み重ね」に感じられないだけの業績になっていればというのが、私達一同の願いです。

このシリーズをお使いいただいて、「Two heads are better than one. (三人寄れば文殊の知恵)」とお感じになるか、それとも、「Too many cooks spoil the broth. (船頭多くして船山に登る)」とお感じになったか、率直な御意見をお聞かせいただければと願っています。

この出版を通じて、荒竹三郎先生並びに、荒竹出版編集部 の松原正明氏に大変お世話になりましたことを、特筆して感謝したいと思います。

一九八七年秋

ミシガン大学名誉教授
上智大学比較文化学部教授

名柄 迪

はしがき

日本語学習の中で、文章や言葉を適切につないで、話し手の意図をより明確に伝えるように組み立てていくことは、大変重要な作業であり、注意深い練習の積み重ねを必要とします。

初級課程の文法を一応習得した程度の学生の作文を見ると、一つ一つの文の文法的誤りを直しても、全体として何かぎごちない日本語という感じを与えるものがあります。その原因の一つに接続の問題があると思われます。すなわち、接続詞が足りないために、前後がうまくつながらず、切れた感じになったり、同じ接続詞を何度も繰り返して、単調な幼稚な文章になってしまったり、また接続のしかたが適切でないために、意図するところが明確に伝わらないということもあります。

一方、接続詞には、あとに続く部分の内容を予測させるという大切な働きもあるので、長文を速く正しく読みとるためにも、その理解が重要な鍵になります。

vii はしがき

このように、話し言葉でも、書き言葉でも、あるまとまった内容を日本語らしい日本語で表現するためには、適切な接続表現を用いることが不可欠です。接続表現の練習という目的のためには、従来の接続詞だけに限定せず、動詞活用形、助詞、副詞、さらに連語的なものまで含めて扱い、総合的な文章構成力を養うことが肝要であると考えました。日本語の接続表現は大変数が多く、多様で、また意味や形のよく似ているものもたくさんあります。その上、日本語独特の微妙な感情や意味の違いを含んでいるので、外国人学生にとっては、それぞれの意味や使い方を十分理解して使いこなすことは、簡単ではありません。そこで本書では『日本語教育のための基本語彙調査』（国立国語研究所）

と『日本語教育事典』（日本語教育学会）を基に、各種の中・上級教科書、新聞、雑誌、一般の書物なども参考にして頻度^{ひんど}の高い八十六の項目を取り上げ、要を得た解説、豊富な用例と練習問題とによって、自然にこれらの用法を習得できるように工夫しました。

この巻の完成にあたって、陳敷^{ちんぷ}さん、リディア・ユーさん、ドリス・グロスさん、ウルリッヒ・デーソンさん、黄恵玲さんにご協力頂いたことを記し感謝の意を表したいと思います。

一九八八年二月

横 林 宙 世
下 村 彰 子

本書の使い方

一 本書で扱う「接続の表現」

「接続の表現」とは何かについては種々の論議がなされるでしょうが、この本で扱っている接続の表現は統語論的には以下のようなものです。

1 文節の切れ目が後の文への接続を予想させるもの……仮定形、タリ形、テ形などの活用形（連用形による接続は「テ形」と重なる部分が多いため省いた）、および、「ながら」「つつ」などの接続助詞。

2 従来、接続詞または接続助詞と考えられているもの

(1) 前文にかかるもの……「ので」「から」などの接続助詞。

(2) 後文にかかるもの……「そして」「しかし」などの接続詞。

3 接続副詞と考えられるもの……「結局」「むしろ」など。

4 連語的なもの……「それはそうと」「とはいふものの」など。

ただし、時間を表す「とき」「まえ」「あと」などの名詞あるいは形式名詞、「まず」「つぎに」などの副詞、および、重文、複文の問題については本シリーズの他の巻で取り上げるので、ここでは扱いませんでした。

意味分類に関しては市川孝氏のものを参考にし、大きく三つに分けました。それをさらに十二の下

位分類にわけてあります。

二 本書の構成

この本の構成は次のようになっています。

見出し語（項目）

1 接続のしかた

2 意味、用法

3 用例

練習問題（数項目ごとに）

総合練習問題

接続のしかたは活用形はそのまま書きました。接続助詞については文法用語を避け、学生がよく知っている具体的な動詞、イ形容詞、ナ形容詞、「行く」「安い」「静か」で代表させてどう続くかを示してあります。名詞はナ形容詞と同じ接続の場合は略しました。

意味については学生が読んで分かるような平易な書き方を心掛けましたので、教師のために参考となる用語を「」に一言入れました。

用例の後には必要に応じて【注】をもうけ、言い換え可能な表現や参考になる事柄を示しました。

また、練習問題の前に各接続表現の特徴を一口メモ的に簡単にまとめたところもあります。

総合練習問題の後半は新聞記事などを基にしたもので、実力テストとして利用出来ます。

本書で使われている記号は次のような意味です。

- 1 見出し語および例文の「／」はどちらの言い方もあるという意味。
- 2 例文の前の×はその文は正しくないという意味。
- 3 見出し語の（ ）は省略可能という意味。

三 本書の利用法

この本は教室用としても独習用としても、あるいは教師の参考例文集としても使用できるように作られています。

先生がたは学生の力に応じて語彙を変えたり、例文や問題を選んでお使い下さい。

学生の皆さんがこの本を使って自分で接続の表現を勉強する場合、例えば次のような方法が考えられます。

新しい接続表現を勉強したり、これまでの知識を整理したい場合

- 1 (見出し語を見て接続のしかたを考える。そのあと、本で接続のしかたを確かめる。)
- 2 自分で例文を作って、用法を考えてみる。本で用例、用法を読み自分の知識が正しいかどうか確かめる。
- 3 自分の知らない用法があったら、その部分の用例は特に丁寧に読む。
- 4 練習問題を解いて答えを合わせる。間違ったものはもう一度、用法、用例にもどり考えてみる。
- 5 総合練習問題を解いてみる。

接続表現の復習をしたい場合

- 1 (四角で囲んだ文法のポイントを読んでから) 練習問題を解いてみる。
- 2 答えを合わせて間違^{まちが}ったところや分からなかった部分は、用法、用例にもどりよく勉強する。
- 3 総合練習問題をして自分の力を試してみる。

多くの方がこの本を十分に活用してより適切な豊かな日本語の表現力を身につけて下さることを願っています。

目 次

本書の使い方 xvii

第一章 二つの事柄^{ことば}を論理的関係でつなぐ表現

.....

1

一 順 接 1

〔一〕 条件を表す言い方 1

1 ば 1

2 たら(ば) 2

3 なら(ば) 4

4 と 6

〔二〕 先に理由を述べ、後に結果を述べる言い方「帰結」 13

A 「から、ので、て」 13

1 から 13

2 ので 15

3 て／で 15

B 「ため、その結果、だから、したがって、ゆえに」 20

1 ため(に)／そのため(に)／このため(に) 20

2 その結果 21

3 だから／ですから 21

4 したがって「従って」 22

5 ゆえに「故に」／それゆえ(に)「それ故(に)」 22

〔三〕 話が発展していく言い方「展開」 25

A 「すると、そこで、それで、それでは」 25

1 (そう)すると／とすると／と 25

2 そこで 26

3 それで／で 27

4 それでは／では／それじゃ(あ)／じゃ(あ) 28

B 「それなら、こうして、まして、一方」 33

1 それなら(ば) 33

2 こうして 34

3 まして 35

4 いっぽう「一方」 35

〔四〕 先に結論を述べ、後からその理由を述べる言い方「解説」 38

1 なぜなら(ば)／なぜかといえ／なぜかという 38

2 だって 38

3 というのは／といいますのは 39

二 逆 接 42

〔一〕 条件を表す言い方 42

1 とても／でも 42

2 ところで 43

3 と 44

〔二〕 前に述べた事に対して反対の事柄ことごとを続ける言い方「逆接」 47

A 「しかし、けれども、だけど、が、だが、ところが」 47

1 しかし 47

2 けれども／けれど／けど（も） 48

3 だけど（も）／だけれど（も）／ですけど（も） 49

4 が 50

5 だが／ですが 52

6 ところが 52

B 「でも、それでも、にもかかわらず、それにしても、それにしても、のに」 56

1 でも／それでも 56

2 （それ）にもかかわらず／にもかかわらず 58

3 それにしても／にしても 59

4 それにしては／にしては 59

5 のに／それなのに 60

C 「ものの、ものを、くせに、からといって」 62

1 ものの／とはいふものの 62

2 ものを 63

3 くせに／そのくせ 63

4 からといって／だからといって 64

第二章 二つ以上の事柄^{こと}を別々に述べるのに用いる接続の表現 ……………

67

〔一〕 二つ以上のことを並^{なら}べて言う言い方 「並^{へい}列^{れつ}」 67

A 「および、ならびに、また、かつ」 67

1 および「及び」 67

2 ならびに「並びに」 67

3 また「又」 68

4 かつ／かつまた／なおかつ 69

B 「し、たり、ながら、つつ、ば、とか、やら」 72

1 し 72

2 たり 73

3 ながら 74

4 つつ 74

5 ば 75

6 とか 76

〔二〕 7 やら 76

A 前に述べたことにつけ加^くえる言^い方^か「累加」 80
 「そして、それから、それに、その上、しかも」 80

1 そして／そうして 80

2 それから 81

3 それに 82

4 そのうえ「その上」／うえに「上に」 82

5 しかも 83

B 「さらに、おまけに、（それ）ばかりでなく、（それ）どころか」 87

1 さらに「更に」 87

2 おまけに 87

3 （それ）ばかりでなく／（それ）ばかりか 88

4 （それ）どころか 88

C 「て」 90

1 て／で 90

〔三〕 二つ以上の事柄^{ことがら}から選^{せん}ぶ言^い方^か「選^{せん}択^{たく}」 94

A 「あるいは、または、もしくは、それとも、ないし（は）」 94

1 あるいは 94

2 または「又は」 96

3 もしくは 96